

大衆文学大系

大佛次郎
村松梢風

大衆文学大系

監修 大佛次郎
川口松太郎
木村毅

講談社

16

大佛次郎
村松梢風

大衆文学大系 16 大佛次郎 村松梢風 集

昭和四十七年七月二十日 第一刷

著者 大佛次郎 村松梢風

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二十一 郵便番号 一〇二
電話東京(〇三)九四五一一二(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 二八〇〇円

©大佛次郎 村松富貴 一九七二年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

目次

大佛次郎集

赤穂浪士

五

村松梢風集

人間饑饉

三

綾衣絵巻

六

残菊物語

九

呂昇物語

六

大奥太平記

三

将棋指し太郎松

六

年 解 解
譜 題 說

卷 六 三

大佛次郎集

赤穂浪士

蔭を歩く男

将軍が退出になったのは暮六つ近い時刻である。警衛が解かれると同時に、待ちかまえていたように外の群衆が雪崩入って、境内を埋めた。松の間に白いほこりが煙のようにもう／＼と起った。その上から、傾いた陽が斜にさして、濃淡の分れた光の柳条を一面に降らせていた。関東新義真言の大本山、護持院の七堂伽藍は、この夕陽の中に松と桜とをめぐらせて燦爛とつらなっていた。

空は広々として絹をひろげたように明るい。「鐘一つ売れぬ日はなし」という江戸の春である。人々は青い松の間を行く荘厳な鹵簿の、槍、扶箱、打物、柄傘などが日にきらめくのを遠

くから見ていた。

公方様のお日和じゃ。と誰かいつていたが、聞いたよけの者は晴れ晴れと微笑してこの太平な時世に生れたことをこの上ない幸福のように考えずにはいられなかった。境内には、護摩のにおいが放縦に思われるまでに漂っている。千手堂、聖天堂、大師堂、常行堂と、人波の動くところに、燭火は輝いて、真言神秘をつむ蔽そかな堂内の幽暗に、金色の扉帳をひらいた仏龕を浮き上らせている。朗々たる読経の声は、香煙とともに堂に溢れて、夕日の空にのぼる。その調和ある音声の高低にあわせて、蔽そかな豪奢と華やかな敬虔の気が人々の頭に花紋を描きながら、ゆるく鷹揚な波動を江戸一円の空に送っているように思われた。大門をくゞって入り堂と堂をつないで動いている群衆も、花を水に浮かせて見るように、色さまざまにたとえようもなくはなやかだった。度々の華奢の禁令も、熟れ切った時代の空気の醗酵を止めることは出来なかつたと見える。程よい日光と湿気とを得て花は咲くよりほかになかつたのである。紫、浅黄、紅打などの染綿の帽子、袖口に針金を入れ綿を厚く入れてふくらみをとる工夫までして美しく丸くきつた袖も軽々と、吉弥結びに帯を結んだ女達、流行の小太夫鹿子、千弥染は、そこにも、こゝにも見受けられる。男も、紅鳶、纒茶、空色などの羽織、下着に緋無垢、着物の裏にも燃えるばかりの紅絹をつけたのが多く、熊谷笠のお武家の後には鎌ひげつけ毛脛を出した奴がお供、さては黒縮緬のひとえ羽織を着たお医者など、師宣の絵から脱け出して来たといえは一番わかりの早い、華奢を尽し優婉の限りの姿をした男や女達が、いき／＼として話したりはゞ笑んだりして間断なくざわ／＼いう足音を聞かせながら、この色の波を押し動かして行くのである。その若い浪人者は、大門の脇に立ってこの雑踏を眺めている

た。

他にも道の脇へ出て通る人間を見ているものは男女ともに多い。が、この若者の切長の目にはどこか人と違うものがあった。齢は二十を出たくらいであらう。鼻筋がとおつて彫の深いはつきりとした顔立をしている。服装を当世風にさせたならば、あるいは人目をひくだけの美貌ではなからうかと思われ。が、顔全体の表情が、齢に似ずおっとりしたところがなくて、けわしいといいたい位つめたく冴えて見えた。目付がそれを代表している。切長の、はつきりした美しい形をしていながら、この華やかな雑沓を眺めても他の者のように浮いた色を見せることもなく、終始、水のようにひやひやかな一色に止っている。いや、時にその冷たい色が凝と重なり合つて来て、冬の水の底にきらりとする魚のうろこのように色なく閃く時がある。その刹那に、肉の薄い形のいゝ唇が隅のところで心持反つて、蔑むような微笑を含むのである。

「あ、あそこへ来た男を知っているか？」

傍で、それまでも何か話していた商人風の二人連れの一人が急にこういだったので、若者は聴耳を立てた。

「ど、どれ？」

「それ、そこへ……奴を連れて、いやに威張つて来る男さ。」

男があごでさす方角を、若者ものびるようにしてのぞいて見た。

「ふうむ、知りませぬな……どこかの御典医ですか？」と連れば怪訝らしかつた。

話題にのぼっていた男は、実際、御典医らしい風采で、その豪奢で寛濶な姿には人目をひくものがあった。供には、奴のほか、弟子らしい男がこれもお古を頂戴に及んだらしい黒縮緬の紋付を、ぞろりと着て鞠躬如としてついでいる。

「知らないのか？ あれが箸屋の伝助という男さ。」

「箸屋の？」

「野暮な声をしなさんな。聞えたら尋常なことでは済みますまい。もとは、箸削りでも、今はれっきとしたお犬医者、減多なことをいうて見なさい。遠島で済めばよいが、二つとない笠の台が飛ぶかも知れぬ。」

と、ひそ／＼という。

若者は、無論聞えない振りをしていたが、「はゝあ」と思つたらしく、ちょうど前を通り抜けて大門をくゞつて行く医者の後姿をじつと見送つた。例のつめたいあざけりを含んだ微笑が、静かに唇に匂つていたのである。

箸屋伝助という男の突飛な出世振りは、ひと頃二人以上人間の集まるところではどこでも噂の種にされたものだ。誰も、口ではさげすんだようにいいながら、内心は伝助の幸運をうらやんでいたのに違いない。伝助のように短日月の間に目も鮮かな出世を見せた者は、何時の時代にもそう減多にあらうとは思われなかつたからだ。それというのもずっと以前からの生類憐愍の御布令からだつた。これもこの護持院の大僧正隆光が信心の念篤い將軍家にお勧めしたからだという。生類の中でも、犬が、將軍綱吉が戌の年だからというので、特別のまるで気違ひじみた保護を受けることに成つていた。野良犬を殺したからといって死罪になつた者は珍しくない。飼犬が子供を生めば強制的に一々の毛色まで書いて届けさせる。役所には市中の犬の戸籍がちゃんと出来ているし、野良犬を收容するために中野に周囲百町もある囲い地を作り犬小屋を建てた。小屋は柿葺の屋根で天井にも床にも板を敷いた立派なものである。炊出所がある。役人番人の小屋がある。日々役人付添いの上でかなりの人数が節のない檜で作つた箱に綿の厚い布団を入れたものを担つて市中

を歩き、野良犬がいれば丁寧に収めて中野まで荷なつて帰るのである。小屋へ行けば、毎日炊出しをして不足なく食事をさせる。犬一匹一日に白米三合、十四について一日味噌五百目、干鰯一升ずつときめてあつた。勿論病氣になれば小屋に医者か二人いて直ぐと手当てをしてくれるのである。

この管屋伝助というのは、麴町三丁目で管削りを生業として、しがない暮しをしていた男だったが、近所の犬達で病氣になつたものに薬をこしらえてやったところが、それがよく利いたという評判がお上に聞えてから数年前大医者に取立てられて、地所の付いた屋敷まで拝領することに成つた。患者があつて迎いがあれば、ものものしく駕籠に乗つて診察に行くのである。

管屋伝助改め丸岡林庵の後姿は、やがて大門の内に消えた。若者のくちからも、例のなぞのような微笑が消えている。寺ではちよつと、暮六つの鐘をつき初めている。若者は黙々として雑沓の中を歩き出した。

將軍の幾度目かのお成を仰いで光榮に輝いたこの護持院が、その夜危うく猛火になめられようとしたのである。最初火を見付けたのは、その頃鎌倉河岸の脇に住んでいた仙吉といつて相当名の聞えた御用聞きだつた。

仙吉は、麴町に用があつて、更けてから寂しい濠端を一人で帰つて来たものだったが、護持院の土塀に沿つて、一層暗い道歩いていると、行手の土塀の内側がぱつと明るくなつて、その一角の樹立の青い色と堂の丹塗の色を闇に浮かせながら、火の子があがつて、ぱちぱちと物の燃える音が聞えた。

まさか放火とは気がつかず、焚火だとはかり思つていたので、その途端に土塀の上に黒い人影が現れて、ひらりと外へ飛

び降りたのを見ると、ぎょつとして身体をかたくしながら、流石に稼業で急に地にうずくまつて様子をうかゞつた。幸いと、その人間はこちらへ歩いて来る。二本差している……と見るか見ないかの内に、

「火事だ！」

という声が土塀の内側で聞えた。

はつとした時、向うは、すた／＼と急ぎ足で通り過ぎようとするのだ。

仙吉が、地を蹴つて立つ。と同時に、武士の方でも、急に人の氣配を知つて振り返る。

と見て、

「もし！」

と軽く何でもなような調子で声をかけたのは、流石に呼吸を心得たもの、相手の出端を巧みにはずしたのだ。

「鷹匠町へまいるには……どうまいったら宜しゅうございましょう……」

相手は確かにまごつていて、咄嗟の措置を取り損じたのだが、

「鷹匠町か？」

と聞き返ししながら、これも曲者、仙吉に右へ廻る氣配を感じると、つと体をひらきさま抜き討とうとしたが、それを感付かぬ仙吉でなく、急に飛びすさつて、

「危ねえ！」

と叫ぶと一緒に、藪から出た糸のように仙吉の手から走り出た縄が、武士の頭上にきり／＼と舞つて、腕にからんでいた。

「むゝ。」

夜目に白く颯と刀身が流れる。よろめいて僵れるばかりのところ、仙吉は踏み止つた。

その間にぱた／＼と相手は駆け出していったのだ。

「畜生！」
と唸る。

手首からむ斬られた縄の端しはかなぐり棄て、早速に自分も後から駆け出していった。

護持院では今、頻りと火に水を掛けているらしい。わい／＼騒ぐ声の間にざぶん／＼と水の音や、何かでたゞいっている音が聞えている。幸いと見付け方が早かったのと、何しろ護摩堂に綱吉自筆の「護持院」の額があってその非常の場合の立退きの用意として役夫料三百人扶持を受けていたこととて、手も揃っていたと見える。火は縁の下を焦がしたぐらいで大事にならず消止めることが出来た。

過失ではない。あきらかに放火である。將軍家の婦依浅からぬ護持院を焼こうとしたとは、容易ならぬ事件だった。

間もなく知らせによって寺社奉行が馬を走らせて来て、暗い樹立の間を提灯の灯がいくつも飛んで来ていた。

狙橋へ出るまでに、武士は、駆けながら刀を鞘におさめていた。

ちょっと立ち止って、振り返って、闇の中に近寄って来る足音を聞くと「五月蠅いな。」というように舌打ちしたが、また走って、角を曲るとかたわらの露路の木戸を押しした。

木戸はゆれながら開いた。

直ぐと、内へ入ると、今度は、もともとおり内側から木戸をしめた。

間もなく、仙吉が息せき切って駆け来て来たが、この町角まで来て、はたと途方に暮れたように立ち止った。

途は三本に別れている。

地面に匍うようにして蹠んで、やみを透かして見たが、目あ

ての人影は見えなかった。

すこし先に、自身番小屋があって、闇の中にぼーっと黄ばんで明るく、障子が見える。

仙吉は急に思い立ったように、そちらへ駆けで行った。

「爺っあん、爺っあん……」

と、寝込んでいる番太を起しているらしい。

その間に、こちらで木戸が音もなくあいて、先刻の武士の姿を吐き出した。

武士は足音を忍ばせて橋を渡った。それから、また急ぎ足になって間もなく九段坂を登ると、馬場を右手に三番町通りを歩いて御厩谷へ降りて行った。

黒板塀が陰気に続く、屋敷町の深夜はひっそりとして夜気が時々立木のこずえを動かすだけである。武士は黙々として歩いて行って、とある屋敷門の前に立ち止ると、そっとくゞり戸を押しして見た。

あかないのを見て、

「佐助！ 佐助！」

と近所を憚るような低い声で呼ぶ。

門番小屋の窓を灯影が明るくした。間もなく、がたびしと戸の開く音がする。

「どなた様じゃ。」

「私じゃ。」

ぎーっと、重い音をたて、潜戸があいた。

「気の毒したな。」

武士は、こういって、内へ入った。

直ぐと正面に玄関がある。しかし、武士はその右手にある木戸を排して、暗い庭に入って行った。かなり広い、樹立の深い庭である。

「兩戸を閉じてしんとしている母屋について廻ると、繁みの奥に小さい離屋がある。」

「武士はそばまで来てからまた低い声で呼んだ。」

「母上……母上……」

「直ぐと、兩戸の内側に人の気配がして、兩戸があく。」

「準人か？」

「左様にござりまする。」

「今、燈火をつけます。」

「いそ／＼とうれしそうな顔が暗い中でも想像出来るような声音であった。」

「いえ、……御寝みになっておいでなので御座りましょう。こんなに遅く申し訳御座りませぬ。」

「こういながら、武士は頭巾をぬいで、衣服の裾のほこりを払いかゝった。」

「間もなく兩戸のすきから来て来たやわらかい灯影は武士の横顔を明るくした。これは今日の夕方護持院の雑沓の中に立っていた若い浪人者である。」

「ほんに、三日も四日もたよりがないので、どうおしかと思っていた。」

母は、ぼんぼりを差向けながら、また、こういった。

「お腹は空いていないのかえ。」

母は、久し振りで来た息子に、三日分も四日分もたまってた慈愛を一度に振撒こうとして心をくだしている模様だった。

「もう、火も消えかけている。お湯もさめて……」

「いえ、何も欲しくはありません。早く寝たいと思います。」

と答えてまた急に、

「叔父上は、また御立腹で御座りましょうな。」

「いえ……」

と当惑顔で、

「お前が来たら何か話があるとは仰有つていられた。家を出たきりにして無沙汰にしておいでなのをよくは思つていらつしやらぬようだ。」

「でも、家にも仕方ありません。叱言をいわれる叔父上が御無理じゃ。今の世の中は働きたいにも遊んでいなければならぬように出来ている。」

準人は、寂しく微笑しながら、

「智慧があつても、腕があつてもじゃ。……いつそ犬医者になつて犬の脈でもとりましょうか？」

「馬鹿をおいでない。」

母は、息子の戯談とも真面目ともつかぬ語調に驚いたらしくこういつてから重苦しくだまり込んで火鉢の灰に眸を落した。

「いえ……決して馬鹿になりませぬ。今日も護持院で一人見ましたが、いや、なか／＼の勢いで御座ります。今の世の中で暮しいゝのは商人と犬とで御座りましょう。武士ならば家柄と身分とが入用で御座います。それでも商人の金の力に頭を抑えられます。兩刀たばさんでおめ／＼と野良犬の番人をしてる者も御座ります。」

「それでも、何時の世になろうとも武士ばかりがまことの人じゃ。商人ずれが如何に成り上ろうと比較にならぬ。商人は石川六兵衛ほどの金持でも、贅沢が分に超えたというので鬨所になつたではないか。上に武士あつての民百姓じゃ。」

「さて、いつまで、このまゝでおられます。世の中は人も知らぬ間に変わります。」

これはむしろ、その変化を望んでいるような口吻に聞えたので、母は再び驚きの目をみはって、無言で準人の顔を見詰め

る。隼人は冷ややかな微笑に唇を反らせているのである。

「ほんに、お父様が昔のとおりでいて下さったなら……」

と思わず女らしい愚痴が出る。

「いや、仰有いませぬ。私は、父上がおなくなりになったのは父上のお倅せだと思っております。」

「何といやる？」

「御立腹なざりませぬ。これは、まことのことで御座ります。父上のように一徹な武士気質の方が如何して今の時世に向きましよう、父上に犬の番が出来ましようや、また今の世間では極く当然のこととされている賄賂を、何で、あの清いお心持に御我慢なされましようや。三河武士は名のみ、形のみ。まことの武士が段々と住みにくくなる御時世じゃ。これを世間が悪くなった故とは思いません。こうなるのが自然の勢いなので御座りましよう。真の武士は世の中に無用のものとなりました。さればこそ、あたら父上ほどの武士が、たかが材木三、四本のために……」

「隼人、またそれを……」

母は、きつとして烈しいながら、その目は知らず知らず涙ぐんで来ていた。隼人も、悲痛を押えて黙然と俯向く。母のためには亡き夫、隼人には亡き父、堀田甚右衛門の最期のこと、二人の胸を一杯にしたのである。

甚右衛門は、そも／＼の初め護持院建立の時に普請奉行を勤めた人だったが、知足院本坊の普請に用いた柱が他の諸堂に比べて、用材がや／＼粗末だったのを、御奉行向念入れざる仕方不埒というので、甚右衛門は三宅島へ遠島になり、配所に病死したのである。隼人のいったとおり、まことにたかが材木三、四本のことであった。それから母子の者はこの叔父の家のかゝり人となっているのだった。

二人とも床へ入ってから、隼人は枕もとの行燈を吹き消した。春の夜の、厚ぼったいやみが、隼人の顔の上にある。何となく息苦しい気持である。そばでは、母が、あたりが暗くなつてからはじめて心の用心の鍵がはずれたように、急にいつもより愚痴っぽく涙っぽくなって、いろ／＼の不平をのべはじめていた。

「いつまでも、この家の厄介になっているわけにも行かないのだから……いっそそこか田舎へ引込んでしまつた方がいゝように思うこともあるよ。けれど、お母さんはそれでいゝとして、お前はまだ若いし……兎に角これからのだから……ほんとうに何といつても江戸だからねえ。子供の内から何をやっても他人様に負けたことがなく、よく出来たお前だもの、自暴を起さないで辛棒強くしていたら、きつといゝことがあると思つていますよ。ほんとうに、お母さんには、お前だけなんだから……」

「わかっています。」

いら／＼した声が答える。闇の中で寝返りを打つ気配がした。

母は、さびしく無言になったが、

「草臥れているところを悪かつたね。睡かつたろう……つい、愚痴が出て終つて。」

隼人は決して睡くはなかつた。頭の芯に熱を持って目は冴えていた。

母が可哀相だとは思ふ。しかし自分の方が余計可哀相な気がした。母はまだわが子の出世に期待を持っているが、自分にはそんな希望は皆目感じられない。たゞ、灰色の厚い壁が目の前に立ちふさがっているのが感じられる。たゞ、ころが、押そらが、びくともしない岩壁な壁である。毀し度い。何もかもたゞ

き潰すよりほかにこの息苦しい気持から逃れる法はないような気がする。ちやうど着物の裾に火がついたようにじっとしてられないように思う。

隼人は、熱した額を急に掻巻かまきの襟に埋めた。何か知らず夜具を蹴飛ばして起き上り度い気持を押殺すために息をつめたのだった。

闇の中に、先刻さつきの不浄役人の烈しい顔付がちら／＼浮んで来た。

とう／＼来るところへ来てしまったというような気がしている。

頭巾かぶとに貌かまをつゝんでいても、先方では職掌柄たしかにこつちの顔を見てしまったらしい。道をきく振をしてそばへ寄って来たのだ。

(なぜ、あの時、斬ってしまったわなかつたのか?)

急にこう考えて、われながらその考えの恐ろしさにふるえた。それでも、この恐怖を乗り切って何とかしなければいけないということは確かだった。この考えは、朝のしら／＼とした色が雨戸の隙から洩れはじめの頃までに、堀田隼人の頭に、一段とはっきりした形をとってかたまつて来ていた。

それから、ぐ／＼と、まるで死んだようになって眠ってしまった。

鎌倉河岸にある仙吉の家には、早朝から子分の目明めあかしが詰め掛けて来ていた。

「ともかく、これア洒落や冗談でやった仕事じゃない。はたいてみたらどんな大物が飛び出すかわからねえんだ。いゝか、紋は鷹の羽で、まだ若けえ男だ。多分浪人もんだらうと思う。手ぬかりなくやってくれ。おれも一風呂あびたら出掛けるつもり

だ。」

仙吉は、元氣よくこういって、手拭と楊子をつかんで立ちあがった。

花の雨

「障子をあけるぜ。こう、むし／＼してはたまらない。すこし風を入れなけりゃア……」

「だから勝手だつていうンですよ。」

「何が?」

と顔を見合せてお互ににっとする。

暗くなつて来た障子の面に庭木の緑がほのかに明るい。犬医者いぬいしやの丸岡朴庵は、たて続けに煙草を二、三服しながら立つて帯を直している。妾めかけのお千賀ちかをものうい目をして眺めていた。

外は、花時はなときにある曇り空だった。朝、朴庵くわんが家を出る時から、ひと雨ありそうな気がしていたのだが、晴れるとも降るともつかず今まで持越しして、汗ばんで、むし／＼と暑い。大気は、悪い酒のようにどんよりと頭に重かつた。

部屋全体が小暗い中に、立っているお千賀だけは明るく見える。その白い手が器用に働いて、畳に蛇のようにうねっている竜門りゅうもんの帯を、くる／＼と、しなやかに胴たねに巻いている間中、派手な着物の袖が五彩の色の渦を流して目もあやに動いているのだった。

ぼんやりと見ている朴庵を、当世風の、ふつくらした白い顔が明るく笑いながら振返つた。

「水木みづき結びですわ。」

と、背中の帯の結び目を見せる。

「ふうむ、なるほど変っているな。流行なのか？」

「ええ。」

明るくうなづく。

「段々世間の女が綺麗になって来るなあ。ひと頃にくらべると随分派手作りで贅沢になったものだ。俺れも、十年遅く生れたらもっといゝことがあつたらうと思うよ。これからの若い者は偉せた。」

「あら……そんなお年でも御座いませぬわ。随分お年寄りくさい事を仰有いますね。」

お千賀が笑つたので、朴庵も笑つた。

五十に手の届いている朴庵に比べて、お千賀は、まだ二十になつていない。この年の隔たりが時折朴庵の憂鬱をそよぶことがある。しかし考えて見れば自分が麴町で箸を削っている頃、どうしてお千賀のような若い美しい女が自分の所有になると空想出来たらう。思えば夢のような気がする。夢といえは、今の結構な境遇になつてからも、時々、自分の昔のように、願の低い棟割長屋で箸を削っている夢を見て、ぞっとすることがあつた。直ぐ傍の溝の、すっぱいような臭気まで夢の中でおつたものである。今では、それがなくなつて、初めから今の身分だつたような気がしているが、……何といつても御時世だ。この御時世でなかつたらおれは一生浮びあがらずに一生箸を削っていたらう。お千賀だつて、おれを振向きもしなかつたらう……と、つくづく考えて、自分が、世界中での果報者のように思われるのだ。

お千賀は、膝を崩して坐つて、朴庵の煙草を吸いはじめた。まだ顔にどこか稚なところが残っている癖に、色っぽい所作である。

(誰でもない、おれが、仕込んだのだ。)

朴庵は、こう考えて、いうばかりなく満足に思いながら障子をあげた。

「これア、愈々降つて来るな。蛙がいないぜ。」

「そうですねえ、どうしても、行らしゃらなければ、いけないですか？」

「うむ、折角のおよばれだからな。しかし流石は三国屋さんだ。桜がまだすつかり咲き揃わぬというのに牡丹を見せようという。どうやって咲かせたものか知らないが、やはり花も金の力で咲くと見える。豪勢なものだなあ。」

といつたが、

「うむ、大分御身分のある方がお揃いの筈だ。そういう場所へは、なるべく行くことさ。犬も歩けば棒にあたるというから……。」

丸岡朴庵が、三国屋の別荘のある向島へ着いたのは今の午後四時頃だった。一時今にも泣き出しそうに見えた空は、雲が切れて薄日をもらし、大川に銀鼠の色を流している。土手の桜は七分というところだったが、気の早い花見舟が三味線や太鼓に川面を騒がせて幾隻も上り下りして行く。土手の上には、無論、真黒な人出が、埃をあびて、ざわ／＼と漣なく続いている。

朴庵の駕籠は、白髯の渡を渡つてから道を右に折れた。間もなく古い土塀や、繁りに繁った生垣の間を行く。樹立の深い、大名の下屋敷や寺などが並んでいて、一丁とはなれない土手の雑沓とは比較にならぬくらい深閑としていた。

どこかで鶯の声が聞えた。
(そうだ。)

とふと思ひ出したことがある。

近頃発句をはじめているのである。地位が出来、金が出来た上は、風流の道の心得がひととおり必要なのである。朴庵はそれに気が付いて、近頃謡曲と発句の稽古をはじめている。明日は宗匠が来る。この前の時今度までで作って置くようにと渡された題が鶯だったのを、すっかり忘れていた。風流とは、なかなかいそがしいものである。

「鶯や……」

と思わず口誦む。

「へえ……」

と鶯籠かきが返事をした。

「何か仰有いまして御座いますか……」

「いや。」

と、相手の無風流を怒ったような声で答えて、腕を組む。

（鶯や……）

である。

しかし、この鶯が二声と啼かない内に鶯籠は、三国屋の別荘の門をくぐって、幽邃な樹立の間の道を支閔まで通った。支閔の左右には立派な鶯籠が幾つも並んでいる。この危うい空模様、これだけの客を集めたのは、流石三国屋の金の力と感心しながら、丁度鶯籠が地に降りたので、外へ出た。

「や、これは、先生……」

こういって、駈け寄ったのは、三国屋の亭主だが、今日は羽織袴で扇子を持って、きちんとしている。

「よく、おいで下さいました。」

「いや、今日はお招きに預かりまして……」

「さあ〜。」

と、振り返ると、傍に控えていた御守殿粧の腰元が、牡丹の模

様ある長い袖をひるがえし案内に立とうとする。

その間に、三国屋は、別に入って来た客を迎えに走り出ている。これは、宗匠風の、渋い服装をした老人で、鶯籠にも乗らず若い侍を供に連れて徒歩で来たのだが、三国屋が、その前に出て砂を管めそうにしてお辞儀をしているのは、余程の自身の御隠居だと見える。やせぎすの、枯れた顔立だが、目が大きくて、ぎよろ／＼している。

「どなた様だね？」

朴庵はそつと、腰元に尋ねた。

「はい。」

と、つゝましく。

「吉良様で御座ります。」

成程と思つた。

吉良義央、上野介、禄は四千二百石だが、従四位上、高家の肝煎りとして、一部に非常な勢力があると聞いている。

高家といえは普通の大名とは違う、今でいえば式部職の家柄で公武往来、儀式典礼の事などをつかさどる。禄は五千石を越えることはないが官位は大々名よりは上で、城中でも雁の間祇候、十萬石の大名と同班であつて、格式は上だ。殊にどんな大諸侯でも営中の式事に当る時など、万事専門の高家から援けてもらわれないと手違いなど起して面目にかゝわることになる。また元来高家が位ばかり高くて禄が薄いところからむやみに威張つて、妙に意地が悪いというようなことが珍しくなく、大名の方から余程うまくして置かないと、際どいところでひどい目にあわされることがある。吉良家というのが、その高家の一つだが、肝煎りといつて、月番を勤めているし、当主上野介義央というのは、従四位上の少将、妻は米沢の大名上杉氏から出て、また長子の綱憲というのが母の実家上杉氏を継いでいるの

であるからこの方面の背景もあり、加うるに今將軍綱吉の寵臣としてその勢力飛ぶ鳥をおとす柳沢吉保に巧みに取り入っているとかで、なか／＼の勢力があるとは、成り上りの犬医者丸岡朴庵でも噂に聞いて知っていたのだ。

「は、あ、あの方が。」

と他愛なく目をまるくした。

「どうぞ、こちらへ……」

案内の腰元が傍からいう。

「は、はい。」

ぼかんとしていたところだったので、思わず返事を重ねて、赤面した。もつとどっしりと落着きを見せて万事臆揚にしているわけではないけなかつたのだ。

朴庵が三國屋と知り合いになったのは、五年ばかり以前に三國屋の犬が病氣にかゝつたのを診察に行つてからだつた。その頃の三國屋は米の相場であつた出来星の金持というだけのことだつたが、その時会話の間に自分が護持院の大僧正様と懇意だというようにふと朴庵が口をすべらすと、それから三國屋が毎日のように物を持って訪ねて来たり、他所へ招いたりしてからは非一度大僧正様にお目にかゝれるようにしてくれというたのみで朴庵が骨を折つてやつたのだが、多分それからのことだつたらうと思う、三國屋が柳沢様を初め方々の大々名に出入りがなつて、めきめきと今の身上を作り上げてしまつた。今では、かえつて朴庵などより上流に顔がひろくなつてゐることは、今日の客の顔ぶれを見ても大凡想像が出来ることだつた。

この寮なども大したものである。度々の御禁令で外構えは質素に普通の別荘とかわりないが、さて内に入つて見ると、あまり目立たないところに金がかけてあつて、造作にしろ調度にしろ、大々名物ばかり。朴庵など、内へ入ると妙に圧迫されるよ

うな気がして腰が浮いていけない。

（商人も、こうなれアたいしたもの。大名以上だな。それにしても吉良様などと、どうやって因縁を結んだものか……とにかく、すばしいことゝいへば、目から鼻へ抜けるような男だ）
と思う間もなく、それまでの内廊下が切れて広い庭が目の前にひらけた。

これは、また素晴らしいものだ。勿論何れ名のある造庭家の設計になつたものであるが、画に見るような削り立つた岩山が空に聳えていて、その裾に木々が鬱蒼たるばかりに枝を交えて茂つていて、小暗いところに白く滝が落ちてさえているではないか？

「これは、これは！」

と朴庵が茫然とした。

と後で、

「これア三國屋、すこし過ぎはしまいか？」

こういつたのは、何時の間にか朴庵の後に付いていた上野介である。

「おとがめを受けるのも馬鹿らしいぞ。」

「いえ、一晚でこしらへた山で御座ります。明朝までには、お目ざわりにならぬようのけることに致しておりますので。」

と、亭主が手をもみながら、愈々驚くべき言葉である。

「なに、一晚で？」

上野介もあきれたらしく、無言でいたが急に笑い出して、

「は、は……金だのう。じゃが、随分とかゝつたであろう。」

「いえ、左様なことは御座りませぬ。種をおあかしすれば、樹木や石は庭に御座りましたものをそのまゝ用いましたゆゑ、あととは、たゞ人間の手間だけで御座りますから、……仕事をこまかく分けまして人数を多く用い、手順をきめて、一番手の仕事